

平成 30・31 年期神奈川県青少年問題協議会

「情報ネットワーク社会における青少年育成・支援」

～子ども・若者のコミュニケーションと育ちを考える～

令和 2 年 3 月

神奈川県青少年問題協議会

目次

平成 30・31 年期神奈川県青少年問題協議会報告の概要	1
------------------------------	---

第 1 章 審議テーマ等

1 審議テーマの設定について	3
2 本報告書について	3
3 協議の経過	4

第 2 章 情報ネットワーク社会の中の青少年～現状と背景～

1 青少年のコミュニケーションの状況	5
2 困難を有する青少年の状況	7
3 情報ネットワーク社会の状況	9

第 3 章 情報ネットワーク社会におけるコミュニケーションと育ちを考える ～議論のポイント～

1 情報ネットワーク社会における青少年の信頼関係の構築と成長	10
2 曖昧なコミュニケーションが人間関係におよぼす影響	11
3 親子のコミュニケーション	13

第 4 章 実践検証事業～青少年のコミュニケーションに関する意識調査～

1 調査の目的	14
2 実施概要	14
3 実施結果	14
4 検証結果	22

第 5 章 情報ネットワーク社会における青少年育成・支援に向けて

1 青少年を育むコミュニケーション	25
2 社会の中で生きづらさを感じている青少年への支援	26
3 青少年の健全育成と情報ネットワーク社会	27

参考編

審議テーマに関する図表	29
平成 30・31 年期神奈川県青少年問題協議会実践検証事業アンケート調査票	34

資料編

平成 30・31 年期神奈川県青少年問題協議会 審議経過	35
平成 30・31 年期神奈川県青少年問題協議会委員	36

第 1 章 審議テーマの設定

平成 30・31 年 神奈川県青少年問題協議会は、情報ネットワーク社会における青少年のコミュニケーションの現状を踏まえ、青少年の育成・支援について調査審議を行うこととした。

<協議の視点>

- 青少年のコミュニケーションのあり方
- 困難を有する青少年への支援
- 情報ネットワーク社会への対応

第 2 章 情報ネットワーク社会の中の青少年～現状と背景～

1 青少年のコミュニケーションの状況

(1) 日常のコミュニケーションを支える SNS

SNS は、青少年の人間関係を維持するインフラとなっている。

(2) 言語能力の低下とコミュニケーション

青少年は、体験の不足から自分の気持ちを言語化することが難しくなっている。

(3) 青少年の自己形成

情報ネットワーク社会の中で子どもが成長し、どのように生きていくのが新たな課題である。

(4) 社会の状況

旧来の考え方や制度が残り、青少年が社会参加する仕組みが不十分となっている。

(5) 地域の状況

地域の自治会などのつながりが弱くなっている。

2 困難を有する青少年の状況

(1) 安心して失敗できる場の不足

青少年が失敗する体験や、安心して失敗できる環境が不足している。

(2) 青少年が社会に出る準備の難しさ

不確実性の高い社会状況等により、青少年が就職等で先を見通しにくくなっている。

(3) 生きづらさを抱える青少年

青少年は、貧困やネグレクト、過保護・過干渉によるストレスをためている。

(4) 困難を有する青少年とコミュニケーション

ひきこもりなどの青少年には、コミュニケーションに苦手意識があることや家族以外の人と出会う機会が少ないことがある。

3 情報ネットワーク社会の状況

(1) SNS 普及における弊害

情報技術は効率性をもたらした一方、「SNS 疲れ」などの問題を引き起こしている。

(2) 情報技術の活用

デジタルネイティブ世代と言われる青少年は情報技術の活用に長けている。

第 3 章 情報ネットワーク社会におけるコミュニケーションと育ちを考える～議論のポイント

1 情報ネットワーク社会における青少年の信頼関係の構築と成長

青少年は SNS 上の信頼関係を育んでいる/信頼の質や形が、流動化する社会の中で変わってきている/青少年は SNS 上で他人にどう自分を見せるかを意識している

2 曖昧なコミュニケーションが人間関係におよぼす影響

青少年のコミュニケーションは厳密ではなくある幅の中で進む/互いに相手を傷つけ合わないようにやり取りをする/なぜ青少年が SNS で曖昧に表現するのかを問う必要がある/今の青少年を前提とした健全育成の方法を考えなくてはならない

3 親子のコミュニケーション

子どもの気持ちを深く問う親子関係が少なくなっている/社会性を育むソーシャルスキルトレーニングを支持する親もいる/他の親子の関わりを目にすることが減る一方で、SNS などでキラキラ光る親子関係を目にする機会が多い

第4章 実践検証事業～青少年のコミュニケーションに関する意識調査～

○ 調査概要

本調査は、企画調整部会委員が第3章の議論のポイントを柱に、青少年に聞き取りを行い、これまでの議論の検証を行った。

○ 検証結果

(1) 青少年の SNS 利用について

SNS の種類ごとに使い分け/受動的な SNS 利用/身近な仲間とのコミュニケーションツール

(2) 青少年のコミュニケーションについて

自分も相手も傷つけないよう気づかう関係/SNS での信頼関係構築は否定的

(3) 「キャラクター」とアカウントの使い分け

実名ではないアカウントで「キャラ」を使い分け/日常生活でも「キャラ」を変える

(4) 「趣味などの目的」とアカウントの使い分け

趣味などを目的としたアカウントの使い分け/身近にいない同じ趣味を持つ人とつながる

第5章 情報ネットワーク社会における青少年育成・支援に向けて

1 青少年を育むコミュニケーション

(1) 自己形成に必要な他者との関係を育む

- ・ SNS によるコミュニケーションは人間関係の拡大にもつながっている。SNS を能動的に活用していくことも大切である。
- ・ 青少年のコミュニケーションの現状を理解し、青少年が他者との関係を育み、成熟していく方法を探していく必要がある。
- ・ ひきこもりなど困難を有する青少年が、信頼できる人と SNS によるコミュニケーションの機会を持つことは、その成長や発達に有益である。

(2) 自己肯定感を育むことを大人が意識する

- ・ 大人が子どもを無条件に受け止めることを意識することや、信頼できる大人の見守りの中で、子どもが、自分が役に立つなどの経験を積んでいくことが大切である。

(3) 成長のきっかけとしての SNS 利用を進める

- ・ 青少年の育成・成長においては「空間、時間、仲間」が必要であるが、今の青少年の多くはそれらが少なく、経験を蓄積することが難しい。
- ・ 日常ではできない体験や学びがもたらす影響は大きいと、積極的にリアルな生活とバーチャルな空間を結びつけ、質の高い生活環境にしていく視点を持つことが大切である。

2 社会の中で生きづらさを感じている青少年への支援

(1) 青少年の情報行動から相談・支援の仕組みをつくる

- ・ 青少年が SNS、インターネットで情報収集する行動を意識した支援を進める。
- ・ 青少年を対象にした相談では SNS を活用することが必要である。

(2) 「ゆるい相談」と「寄り添い型」の相談・支援の場をつくる

- ・ 学校の保健室のように、何でも相談できる緩やかな相談の場が必要である。
- ・ 寄り添い型の支援や様々な情報ツールを使った相談が有効である。

3 青少年の健全育成と情報ネットワーク社会

(1) 大人も青少年も情報リテラシーを高める

- ・ SNS などでは、プライベートな日常の出来事が、パブリックなネットの空間に情報として発信され、青少年がトラブルに巻き込まれることがあるため、大人も青少年も情報リテラシーを高める必要がある。

(2) 地域や行政が SNS を活用する

- ・ 青少年に合わせ、行政や地域は SNS などメディアを積極的に活用していく必要がある。

(3) 情報ネットワーク社会における学び

- ・ 青少年が、テクノロジーにより新しい遊びや学びを生み出し、実践できる機会の提供が重要である。

第1章 審議テーマ等

1 審議テーマの設定について

今期審議テーマ

「情報ネットワーク社会における青少年育成・支援」
～子ども・若者のコミュニケーションと育ちを考える～

県では、「かながわ青少年育成・支援指針」のもと、青少年の健全育成や社会的自立の支援、青少年を育む環境づくりに取り組み、青少年の遊びや地域活動への参加等を通じた多世代との交流や体験活動のほか、青少年が安心・安全に過ごすことができる地域の見守り・居場所づくりを推進してきた。

近年、情報化の進展により、青少年の間でも SNS¹などインターネット上でやり取りするコミュニケーションが増えている。また、小中学校の新学習指導要領では、情報活用能力を言語能力などと同様に「学習の基盤となる資質・能力」と位置づけ、情報通信技術を受け身ではなく、手段として積極的に活用していくことが求められている。

一方で、青少年の中には、日常のコミュニケーションを上手くとれないといったことや、不登校やひきこもりが引き続き生じている。また、SNS 上において青少年が事件・事故に巻き込まれる事や、いじめが起きている。

本協議会では、これまで青少年の健全育成や自立などをテーマに審議してきたところだが、情報ネットワーク社会での青少年のコミュニケーションを審議テーマにしたことはない。

そこで、平成 30・31 年期神奈川県青少年問題協議会は、情報ネットワーク社会における青少年のコミュニケーションの現状を踏まえ、青少年の育成・支援について調査審議を行うこととした。

2 本報告書について

(1) 目的

青少年は、他者が自分をどう見ているのかを通して自分を認識し、自己を形成することから、青少年の成長にとって他者とのコミュニケーションは大きな影響を持っていると考えられる。

そのため、情報化の進展により利用が広がる、SNS などインターネット上のコミュニケーションを含め、より良い青少年のコミュニケーションについて検討していく必要が

¹ SNS : Social Networking Service (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) の略。登録した利用者だけが参加できるインターネットの Web サイトのこと (総務省「国民のための情報セキュリティサイト用語辞典」引用)。LINE、Twitter、Facebook 等。

ある。

そこで、本報告書では、情報ネットワーク社会の中で、青少年の健やかな成長を促すために、コミュニケーションのあり方や、家庭や地域の大人に求められること、行政の支援のあり方について整理する。

なお、本報告書の内容は、令和2年度中に改定予定の「かながわ青少年育成・支援指針」の検討に生かしていく。

(2) 協議の視点

検討にあたっては、次の3つの視点から協議を行う。

○ 青少年のコミュニケーションのあり方

「顔と顔の見える関係」や「SNSなどのネット上の関係」など様々なつながりがある中で、青少年のコミュニケーションの現状を踏まえ、今後の青少年の健全育成について検討する。

○ 困難を有する青少年への支援

不登校やひきこもりなどの困難を有する青少年のコミュニケーションの課題や、支援のあり方について検討する。

○ 情報ネットワーク社会への対応

情報ネットワーク社会における青少年の健全育成や支援など、青少年の健やかな成長を支えるために、大人に求められることや社会のあり方について検討する。

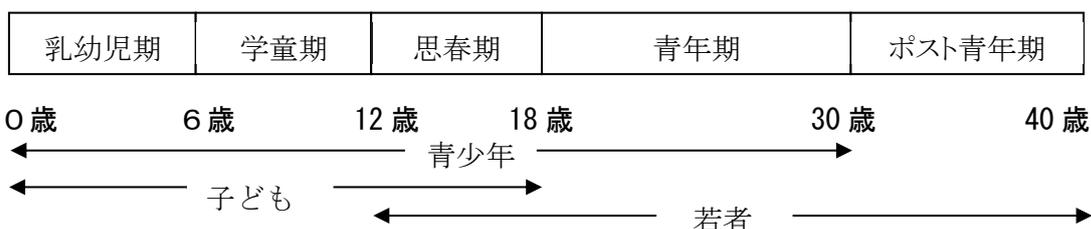
3 協議の経過

- 本協議会企画調整部会は、平成30年度に全部会委員が、各自の専門的見地や取り組み実績を踏まえた意見発表を行った。その発表内容及び意見交換の概要を「中間とりまとめ」としてまとめた。
- また、令和元年7～8月に実践検証事業として、部会委員が関係する青少年を対象にインタビューを行い、「中間とりまとめ」でまとめられた議論の視点に対する青少年の意識や実態について調査し、協議内容の検証を行った。
- これらの経過を踏まえて、最終報告をとりまとめた。(報告書概要1～2ページ)

<参考>

本報告書で使用している青少年等の表現については、「かながわ青少年育成・支援指針」に準じて整理している。

【「かながわ青少年育成・支援指針」における青少年等の考え方】



第2章 情報ネットワーク社会の中の青少年～現状と背景～

1 青少年のコミュニケーションの状況

(1) 日常のコミュニケーションを支える SNS

- SNS の利用により、個人による情報発信や他人との交流が容易になり、今では身近な人との関係を維持するための道具になっている。また、SNS は人間関係を維持するインフラとなっているため、SNS があることを前提に学校や地域などにおける人間関係を考えていく必要がある。
- SNS は、身近な人同士がリアルタイムでやり取りでき、会話のような手軽さから、若者は当たり前に使っている。また、若者にとって、SNS の「いいね」や「リツイート」の数は、その人の価値を表す指標になっているのではないかと。
- SNS では、発信する情報について楽しさや面白さを自分なりに加工・編集でき、そこに感情も一体化させて発信できる。日常のプライベート（私的）な出来事をインターネットのパブリック（公共的）な空間に発信するため、公私の境目がなくなり、青少年がトラブルに巻き込まれるなど、SNS による情報発信は大きな問題を引き起こすことがある。

(2) 言語能力の低下とコミュニケーション

- 学校教育においては、子どもの言語能力とは、表現力だけではなく、論理的思考力を含み、自分自身の言葉を適切に用いて感情を表現する力とされ、その力を伸ばしていくことになっている。しかし、学校教育だけでは、日常生活に関する言語能力を十分に育てていくことは難しいと思われる。
- 子どもたちの言語の応用力が落ち、読解力が下がっていると言われている。学習指導要領では、「言語と体験」が打ち出されたが、言語を支える体験が少なくなり、それによって体験を語る言語が弱くなっているのではないかと。人の意識や自我、人格は、言語で作られてきたが、言語の応用力が落ちることによって、言語で構成されてきた自我を作れなくなっているという懸念がある。
- 親世代は偏差値などを比較する社会の中で育ってきており、感情の部分をあまり見ずに、子どもの学力に注目して、常に周りの子どもと比較し、自分の思い通りにコントロールしようとする親もいる。青少年の中には、乳幼児期の親子関係の中で辛い、悲しいというマイナスの感情を豊かな言葉を使って受けとめてもらえた体験が不足したことで、自分の気持ちを言語化することが難しくなっている人がいる。

(3) 青少年の自己形成

- これまで教育は、家庭・学校・地域という定まった世界の中で子どもを支え育て、社会に自立させていく考え方であった。新しい課題は、情報ネットワーク社会の中で、子どもが成長し、その後どのように生きていくのかということである。何らか

の能力が未熟であっても、社会と関わり社会を構成する者として子どもを捉えることで、「非定住の自己形成²」という課題に応えるようなネット空間を構築できないか。

- 個人のやる気やニーズは、もともとその人が持っているものではなく、関係性の中から発生するものであり、関係性の中で自分の存在を感じ取っていると捉える必要があるのではないか。埼玉県調査によると、非認知能力、いわゆる自己肯定感や承認において、頑張ろうと思う気持ちそのものが学力向上につながる。学力は、単に子どもたちが知的なものを詰め込まれるだけでは向上せず、やる気が出ることと学力には相関関係があることがわかっている。
- かつて、子どもは将来働き手になるという観点から育成や教育の対象となり、ある意味で将来の大人として価値化されてきた。そのため、子どもの成長や発達とは、労働者として働く力を身につけていくという基準がはっきりしていた。評価という点においても、自分の働きがその対象で、それ以外のプライベートな時間は評価の対象ではなかった。現在は、SNSによる情報発信などで、日常生活など全て評価の対象になってしまっているのではないか。

(4) 社会の状況

- いまだに、戦後の工業社会のように「新卒一括採用」という日本型雇用が続き、学歴重視の子育てにつながっている。例えば、50年前は指示された手順通りに物を作る人が必要だったかもしれないが、現在は必要とされる事は変化しており、青少年が生きている世界と制度のずれが生じている。青少年は、そのはざままで苦しんでいるということがあるのではないか。そこに、バーチャルなものが入り込んで、青少年がそちらに向かっているのではないか。
- 現代に合った形で、青少年が社会参加する仕組みができておらず、青少年にとっては、大人に従わなくてはならない、自分の意見がどうせ通らないという社会構造自体をつまらなく思っているのではないか。青少年が提案したことが形となって受け止められ、承認されていく社会をどう作るのか。青少年と大人は、社会を構成する対等なパートナーと考えることや、大人が青少年の力を信じてまちづくりをしていくことが必要ではないか。

(5) 地域の状況

- 地域の自治会や子ども会などのつながりが弱くなり、大人が生き生きとしている環境に子どもがいて、この町に暮らしてよかったと思える文化が少なくなってきたのではないか。
- 厚木市森の里地区では、「地域社会が地域の子どもの育てよう」、「地域ぐるみで、

² 「非定住の自己形成」：家庭、学校、地域という定まった場所での子どもの自己形成に対して、「SNS やインターネットの世界という定まらない場所（＝非定住）」で自己形成すること。（藤井部会長意見発表資料）

子どもの縁でつながる人のネットワークづくり」、「ともに学び、ともに育つ、成長するまちづくり」を活動の理念としている。子どもたちが実体験できる場の創出を通して、多様な人との出会いから子ども同士の仲間づくり、大人同士の仲間づくり、人のつながりが生まれている。

2 困難を有する青少年の状況

(1) 安心して失敗できる場の不足

- 青少年が失敗する体験が不足している。親たちが失敗や怪我をさせまいとすることにより、青少年は極度に失敗を恐れている。安心して失敗できる環境を地域に用意することや、できないということを大人が、そして青少年自身が受け入れていくことが大事である。
- 学校以外の育ちをどう位置付けるか。不登校は悪くない、問題行動ではないということを地域に広げていく必要がある。また、高校生世代以降のひきこもり・不登校支援が不足している。

(2) 青少年が社会に出る準備の難しさ

- 「VUCA」の時代³といわれるように、不確実性、複雑性が高い時代となり、正解がなく、前例や経験が通じにくい社会になったことから、青少年が社会に出る準備が難しくなっているのではないか。大学への入学や就職の内定により将来が約束されるということではなく、就職してもすぐに離職するなど、これまで以上に成長するには時間がかかるという印象がある。
- ミレニアルズ世代⁴が育ってきた環境には、格差が広がる中でも経済的な豊かさを背景としたサービスがあった。また、その世代は、個性が尊重される教育を受ける一方、試行錯誤する自由な遊びの経験などが少ないと思われる。

(3) 生きづらさを抱える青少年

- 青少年は、様々なストレスを抱えている。特に、貧困やネグレクト、過保護・過干渉によるストレスをためることが多くみられる。
- 青少年には、いろいろな場面で「自己責任」を問われたり、失敗は許されず完璧(100%)でなければならないという思い込みがある。失敗したら社会は助けてくれず頼れる人を作っておかないと危険だと考えている大学生も多くいる。
- 「やりたいこと」は、様々な体験をしないと出てこないはずだが、子どもの頃か

³ 「VUCA」の時代：「Volatility（変動性、不安定さ）」、「Uncertainty（不確実性、不確定さ）」、「Complexity（複雑性）」、「Ambiguity（曖昧性・不明確さ）」がより顕在化してくる時代（平成30年3月経済産業省中小企業庁「我が国産業における人材力強化に向けた研究会（人材力研究会）」報告書引用）

⁴ ミレニアルズ世代：1980年前後～2000年前後生まれの世代を指す。（田中委員意見発表資料引用（@DIME「若者の心をつかめぬ企業に未来はない」））

ら「やりたいこと」をしなさいと言われ続け、「やりたいこと」がない自分は駄目な人間だと思ってしまう。そのため、「やりたいこと」を自分で決めて、目標を立ててやっていかなくてはならないというプレッシャーがあるのではないか。つまり、子どもに常に完成品であることを求めるような社会になり、子どもにとっては、常に「白か黒か、白であれ」と言われ続けている苦しさがあるのではないかと考える。

- 「やりたいこと」よりも「やらねばならないこと」が優先される社会の状況がある。また、親や大人から求められ、与えられることが多すぎて、自分が何をしたいのかを考える時間的・精神的余裕を持たずに育ってきた若者たち。疲労感だけが蓄積される生活の中で、様々な体験の不足から、やってみたいことを見出しにくい環境になっている。

- 今の子どもたちは、「個性的であれ」と言われ続け、人と比べて個性的であると思っても、実はその個性に序列があると思っている。

これまでは、子どもが切磋琢磨して上昇しようとする、そのための基準がはっきりしていたが、今では基準が多元化し、曖昧化している。このため、切磋琢磨して上昇することそのものが困難となっている。つまり、上昇という方向性がはっきりしなくなる事態となり、その中で比較優位をとるために、引きずり下ろし合っしまい、結果的に下方平準化がおこるのではないか。

- あるNPOによる電話相談では、青少年本人とつながることは少ないが、LINE相談では、短期間に多くの本人とつながることができた。一方で、LINE相談の場では、途中で相談者の反応がなくなり、相談が終了したのかと思うと、風呂やトイレに行っていたということがあるなど、こうしたことが、日常の友人関係でも生じていると考えられる。

- 子どものSOSは、なかなかキャッチできない。親に心配をかけまいとして助けると言えない、プライドが邪魔するなど相談機関を利用しないことが多い。そもそも、子どもは悩みを打ち明けても大丈夫という安心がないと、知らない大人には、言葉にして気持ちを伝えることができない。研修などを通して、子どもたちのSOSをキャッチできる感度のいい大人を地域の中で増やしていく必要がある。

(4) 困難を有する青少年とコミュニケーション

- 「若年無業者白書（認定NPO法人育て上げネット）」の分析では、困難を有する青少年は、相談できる友人が少なく、大半が家族に相談している状況があり、自信がないことやコミュニケーションの苦手意識を改善したいと思いつつも、職場で仕事上のわからないことを相談できない青少年も多い。

- 困難を有する青少年の中には、「暮らし」のモデルを持たない人が多くいる。経済的に貧しいだけでなく、家族以外の人と出会う機会が少ないことによる関係性の貧困、コミュニケーション能力の低さがある。受容され、安心して話せる人間関係を育むことが大切である。

3 情報ネットワーク社会の状況

(1) SNS 普及における弊害

- いつでもどこでもあらゆる情報にアクセスできる便利な社会になったが、生身の人間の情報処理能力がオーバーフローして心身に負担がかかっているのではないか。
- 情報技術は知的作業に効率性をもたらし、高速かつ大量の情報処理を可能にした一方で、「SNS 疲れ」や「ネット炎上」、「ネットいじめ」、「フィルターバブル⁵」など、心的状態に様々な問題を引き起こしている。

(2) 情報技術の活用

- デジタルネイティブといわれる若者世代は、SNS やクラウドファンディングサイト、ブログなどあらゆるツールを使い、自分でプロジェクトを構想して、思ったことを実現しようと形にすることに長けている。
- 情報技術を社会に導入することによって、単に便利さや、儲かるということではなく、人間が幸せで元気になるかどうかという「Well-being」という基準を持って開発する研究が進んでいる。大人が率先して、情報技術を受容して利用していくことが大切ではないか。その際に、「Well-being」ということを基準に考えていくことが、新しいポイントになるのではないか。

⁵ フィルターバブル：検索エンジン（人工知能）はユーザの嗜好を学習し、ユーザが喜ぶ結果を優先的に表示する。そのため、各ユーザの見たくない情報を遮断する（フィルタ）ことで、自分の見たい情報のみの「泡」の中に閉じられてしまう。（坂倉副部長意見発表資料引用（イーライ・パリサー著「フィルターバブル-インターネットがかくしていること」））

第3章 情報ネットワーク社会におけるコミュニケーションと育ちを 考える～議論のポイント～

1 情報ネットワーク社会における青少年の信頼関係の構築と成長

- 小学校の高学年や、中学生、高校生にとって、SNSによる友達とのやり取りは、会話と変わらないという認識がある。友達とつながっていたいと、SNSで一晩中つながり、誰かが発信したことに「うん、うん」など相槌を打つだけのやり取りが続くこともある。また、SNSによる会話では、信頼が失われないように丁寧なやり取りを心がけていると感じる。青少年の中ではSNS上の信頼関係を育むことがとても大事になっていると思われる。これは、大人が近所や地域の人と丁寧にお付き合いをするということと似たような感覚だと思う。
- メディアを通じた情報発信・受信は、部分的で不完全なものである。例えば、テレビのメディアには、情報発信する側の主観的な意図や、情報を部分的に切り取り、ある一定の感情を押し付けているのではないかという意見が以前からある。SNSによる情報発信・受信についても同様に部分的な情報のやり取りであり、信頼関係を生み出すほどのコミュニケーションにつながるのかが問題である。部分的な情報のやり取りから生まれてくる新しい形の信頼関係は、人間を成長させるのだろうかと思う。
- 「VUCA」の時代という言葉に象徴されるように、不確実で複雑な時代となっている現在、信頼のあり方も非常に多様になってきているのではないか。信頼の質や形が、流動化する社会の中で変わってきているとみることもできる。
- 情報ネットワーク社会における信頼は、SNSで受信する相手が特定であるのか、不特定多数であるのかにより条件が違ってくるのではないか。相手が不特定多数の場合、信頼性は生まれえないのではないか。相手の顔が見える場合と、見えない場合では、話し方なども異なると考える。
- 大学生の間では、SNSの使い方として、例えばLINEはおしゃべりとして、FacebookやInstagramは、友達と過ごしている様子などを動画で発信していることが多い。また、今の自分の思いを表現しておき、後で振り返る材料にしている人もいる。さらに、意図的に発信する情報を選択して、他人にどう自分を見せるかを意識していると感じる。不特定多数への情報発信においても、自分をどのように見てもらいたいかということ意識していると考えられる。
- 今の若者は、安心して自分を表現し、ありのままの自分を受容されてきた経験が薄いのではないか。自分が傷つきたくなく、言葉にすると否定される気がして、LINEなどでは、スタンプで誤魔化しているという印象も受ける。こうしたことから、SNSのやり取りでは人間を成長させるようなことは難しいと感じる。

2 曖昧なコミュニケーションが人間関係におよぼす影響

- メッセージのやり取りの基本的なコアの部分は言語であり、言語により社会も運営されてきた。自分の考えを言語化すると、それに対する批判というものは生じるものである。それが議論ということであり、デモクラシーの基礎となっている。しかし、批判だけであると、非難や誹謗中傷になる可能性もあるため、防御的になる。今の若者は、言語だけではなく、漫画やイラストなど多様なメディアがある環境の中で育ってきている。言葉で表現することで非難されるのであれば、スタンプや写真などを使う方がいいと、言語に対して消極的になると考える。
- 曖昧なまま進むコミュニケーションでは、気持ちを読み取るとは難しく、齟齬が生じるのではないかと思われるが、ある程度の範囲の中で少々ずれたとしてもコミュニケーションは進んでいく。これまでは、相手が出した情報の意味を的確に受信するようにされてきたが、今のコミュニケーションは厳密ではなく、ある幅の中で進む「曖昧なコミュニケーション」というものがあると考えられる。
- 若者は、自分は傷つきたくないし、相手のことも傷つけないだろうという想像のもと「曖昧なコミュニケーション」をしているのではないか。とてもつながっていたいけれども、深めたくはないということではないか。これまでは、お互いに分かり合うということが信頼だと考えられてきたが、今の若者の思っている信頼の質や幅は違っていると感じる。
- 若者の対面でのコミュニケーションにおいても、波風をたてずに曖昧なまま、お互いに気持ちを共有しているというつながり感で進み、うまくいかなくなるということがあると感じる。物事をはっきりさせ、白黒つけることや、自分の考えが異なることを表明する勇気がなく、その場にいる誰かが何とかするだろうと、曖昧なまま終わることがあるが、それは、成熟していないからなのかと感じる。
- ひきこもりや生きづらさを抱えるような若者には、白黒はっきりさせることや「0か100か」しか考えられないという特徴を持つ人が少なくないと感じる。そうした人は、「曖昧なコミュニケーション」が進む場に居づらくなることではないか。なんとなくスタンプを送信できれば楽だが、それができずにこだわる若者は、生きづらさを感じるようになると思う。
- 困難を有する若者の場合、特に、居づらい場から抜けて別の仲間と関係を深めることは難しいと感じる。また、LINEのグループの中に一人異質な人がいると、その人を除いたグループを作り、いじめにつながることもある。大人数のグループの中でも、熱意のある人同士でグループができ、その中でも仲の良い人同士のグループができるというように、小さいグループができていくように感じる。グループの友人は、同じような価値観を持っているため、正確ではなくても、曖昧なままで何となくわかる。居づらい人ははじかれていくように思う。若者は、グループからはじかれぬように、とりあえず答えて、皆が向いている方向にいかうとしていると感じる。
- 友人関係や仲間関係が、「曖昧なコミュニケーション」により快く進んでいくために小さなグループになっていくということは、同質性が高く、とても小さなコミュニテ

- ィがたくさんある状態になる。このような状況で、社会性が身につくのだろうか。また、自分とは異なる価値観があるという認識が乏しくなってしまうと思う。
- 若者は、SNS のグループごとに場の機能や性質を見極めることを意識し、自分の表現を使い分けていると感じる。
 - 若年無業者を支援する中では、「就職して多世代の人と仕事をしたが、価値観の違いから企業で働くことが難しくなり、自分で起業したい」と相談されることがある。自分が育んできた、演じて使い分けてきたコミュニティはあるが、社会に出て異質な価値観の中ではなかなか生きていけない人がいる一方で、生きていける若者もいるが、その違いは何だろうかと思う。
 - リアルな対面を前提として、お互いの思いを吐露しあった経験のあるグループだと SNS での自己開示もとても進むが、SNS の関係だけだとそうはなりにくい。対面と SNS の活用というセットでコミュニケーションが深まっていくと考える。
 - SNS で自分の意見を長文で送ってくる人に対してスタンプ一つで返信するなどコミュニケーションの「熱量の差」があるとなかなか話が進まず、お互いにイライラすることがある。
 - 自分がしたこと、誰かに迷惑をかけることになると思えば、謝罪の言葉とともに、理由を説明する必要があるが、若者の中には SNS 上でそのようにしないケースがある。そうしないのは、人間関係がみえておらず、体験の不足により想像力が働かないからではないかと思う。
 - 若者にとって、感情という曖昧なものでつながっていくコミュニケーションが日常的にあるならば、言葉できちんと説明することは、怖いことなのではないか。言葉で説明すると分かり合えないのではないかといった恐れをどのように緩和し、フォローできるのだろうかと思う。
 - なぜ、青少年が SNS などで曖昧な表現をしなくてはならなくなっているのかを問う必要がある。子どもたちが置かれた環境が、全人格そのものを即時的に評価するようなものとなり、常に周囲の目にさらされ続けている。しかも、評価基準がはっきりしておらず、何かを表現したり、やりとりするだけで、思わぬ形で評価されたり、批判にさらされたりすることが起こる。そのため、できるだけ自己主張せずに、曖昧な形でやり過ごすことを処世術として身につけているのではないか。そういった点をとらえないと、結果的には SNS が青少年のリアルの一部であることを否定し、SNS は良くないものであるという結論で片づけてしまうことになりかねない。
 - 青少年の健全育成支援については、今の若者像を念頭において議論していく必要がある。今の若者は、「曖昧なコミュニケーション」により人間関係を築き、その人間関係も曖昧で、信頼の質や形も変化しているように思われる。体験活動は必要であり、重要であるが、その絶対量は不足している。今の若者像を前提とした、別の方法で健全育成を支えられないかということを考えなくてはならない。

3 親子のコミュニケーション

- 子どもが育つプロセスの中で、親が先回りをして子どもの気持ちをくみ、親が判断してしまうことが多くなっているのではないか。子どもの成長のために、子どもの気持ちを深く問う、丁寧に語り合うという親子関係が少なくなっていると感じる。
- 家庭が小さな社会であると捉えると、親が子どもの気持ちを確認せずに深めていないことがあるなど、家庭内にも「曖昧なコミュニケーション」があり、そのことが他とのコミュニケーションに影響していると考ええる。
- 保護者も子どもを他者として見ておらず、親子で依存していることが多いのではないか。それが青少年になってからのコミュニケーションのありように影響しているように思われる。
- 同じ家の中にいるのに、親子が SNS で連絡を取っていることがある。夜中に帰ってきた子どもが SNS で「ごめん、おやすみ、寝る」という発信で終わり、親も子どもに何か事情があったのだろうかと問い詰めることもしない。親子でさえ、コミュニケーションを対面でとることが薄れ、気持ちを言葉にして説明しようということが少なくなっているのではないか。自分のことをわかってほしいという子どもは増え、自分の気持ちを受け止めてくれないと怒りになってしまう。ベースとなる家庭での親子関係が崩れていることで、感情を言葉にして伝えられなくなっているのだと思う。
- ある団体では、子どもが何か攻撃されたときに「やめて」と言うなど、シチュエーション別に子どもが、自分の気持ちをどう伝えるかというソーシャルスキルを高めるトレーニングをしている。幼児から小学校2、3年生くらいまでの子どもを対象としており、親子で参加することもできて、親から支持されている。
- これまでは、家庭教育の中で社会力のようなものが育まれてきたが、今は親も何が正しい答えかわからず、ソーシャルスキルトレーニングなどに頼っていると考ええる。
- ある地域では、親子参加型のキャンプ募集をしたところ申し込みがなく、子どもだけの参加に変えた途端に、多くの申し込みがあった。親は子育てについて、誰かに何とかしてほしいと考えている。子どもがキャンプなどに参加している間に、親は自分がほっとしたいという気持ちもあるだろうと思う。
- 子育てに意識が高い親は、過保護・過干渉になりがちになり、意識が低い親だと子どもに無関心でネグレクトのような状況になりがちになる傾向があると感じる。
- 子育て中の親が、他の親子がどう接しているかを見る機会が減っているが、他の親子の関わりを見ることは、とてもいい学びになる。一方で、SNSなどでキラキラ光る親子関係を目にする機会は多く、親たちは苦しい思いをしていると思う。
- 親こそが、いろいろな社会体験を通じて親として育つことはとても大切である。子どもを対象としたイベントを実施する際、学校に協力してもらい、全児童が対象となるようにした上で、多くの保護者が参加に前向きになるような仕掛けをつくることも必要だと考える。
- 青少年が、人間関係の中で他者を意識していないと、コミュニケーションや、信頼関係が不十分なものになり、社会参加や地域の活動が乏しくなっていくと考える。

第4章 実践検証事業 ～青少年のコミュニケーションに関する意識調査～

1 調査の目的

本調査は、神奈川県青少年問題協議会企画調整部会の「中間とりまとめ」としてまとめられた事項について現在の青少年の意識を聞き取ることにより、これまでの協議内容を検証するとともに、最終報告に向けた協議の参考にすることを目的に実施した。

2 実施概要

(1) 方法

企画調整部会委員が、関係している青少年にインタビューした結果を集約する。

インタビューでは、第3章の議論のポイントを柱に質問を行い、青少年の意識について聞き取りをした。なお、本調査は神奈川県の若者の全体像を把握するものではなく、限られた人数であるが、多様な若者から様々な意見を聞くことに重点を置いた。

＜インタビュー質問の柱＞

- 第3章 1 情報ネットワーク社会における青少年の信頼関係の構築と成長
- 2 曖昧なコミュニケーションが人間関係におよぼす影響
- 3 親子のコミュニケーション

(2) インタビューの対象

インタビューでは、小・中・高校生、大学生、20代の社会人など対象年齢を幅広く設定するとともに、生きづらさを経験した人など多様な青少年を対象とする。

(3) 実施期間

令和元年7月から8月

(4) インタビューの形式

インタビューの形式は、1対1や複数人に対して同時に行うなど、委員が関係する青少年に合わせた形式で実施した。

3 実施結果

(1) インタビュー対象者の状況

ア 対象者

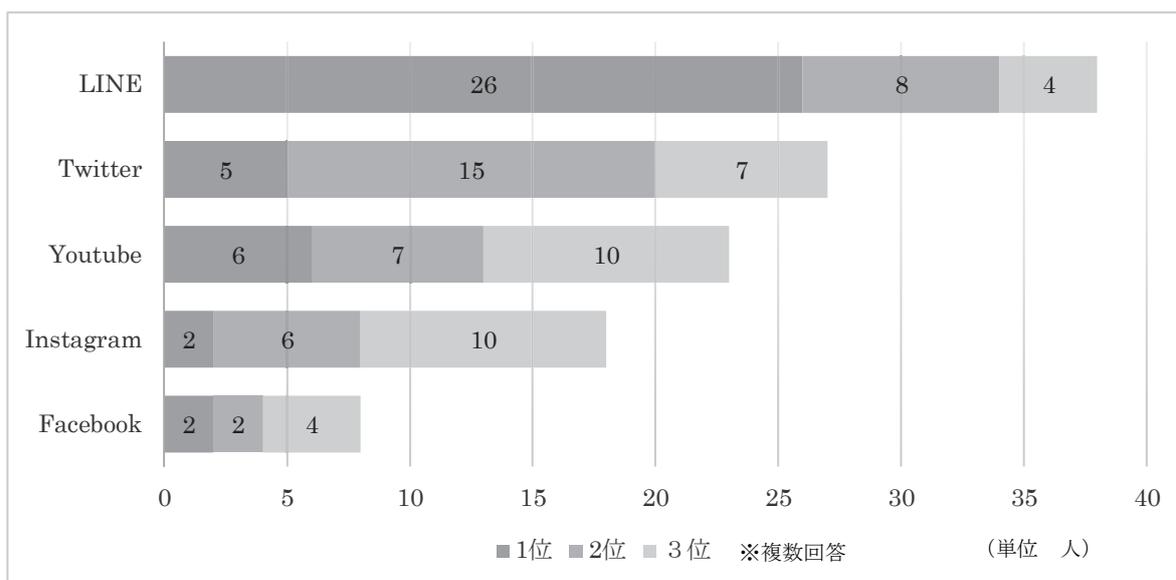
人数 42名（男性21名、女性21名）

内訳 中学生1名、高校生8名、大学生24名、社会人(20代)8名、
社会人(30代)1名

居住地 県内38.1%、県外50.0%、不明11.9%



イ 使用しているソーシャルメディアの状況



	SNSの名称	主な使用目的
1位	LINE	・「友人・家族とのコミュニケーションツール」
2位	Twitter	・趣味や流行などの「情報収集ツール」 ・「友人とのコミュニケーションツール」 ・自分の作品(写真・絵)の投稿、他人の投稿へのコメント等「不特定多数の人とのコミュニケーションツール」
3位	YouTube	・趣味や流行などの「情報収集ツール」 ・自分の作品(写真・絵)の投稿、他人の投稿へのコメント等「不特定多数の人とのコミュニケーションツール」
4位	Instagram	・趣味や流行などの「情報収集ツール」 ・「友人とのコミュニケーションツール」 ・自分の作品(写真・絵)の投稿、他人の投稿へのコメント等「不特定多数の人とのコミュニケーションツール」
5位	Facebook	・「友人・知人とのコミュニケーションツール」 ・イベントなどの「情報収集ツール」

ウ SNSの活用に関するアンケート結果

本調査に協力いただいた若者は、SNSについて95%が友人と、81%が家族とのコミュニケーションに活用していると回答している。また、67%が友人の投稿にコメントを書き込むと回答しており、SNSを身近な人とのコミュニケーションに利用していることがわかる。一方、面識のない人や不特定多数とのコミュニケーションにSNSを利用していると回答した人は36%であり、身近な人とのコミュニケーションと比較して少ない割合となっている。また、自分の日常などをSNS等に投稿することは、50%が写真・動画の投稿、40%が文章の投稿と回答している。

【SNSの活用に関するアンケート結果】

	質問	回答	
		よくあてはまる/ 少しあてはまる	あまりあてはまらない /全くあてはまらない
1	友人とのコミュニケーションにSNSを活用している	40人 (95%)	2人 (5%)
	(関連するインタビューコメント) <ul style="list-style-type: none"> ・友人との事務連絡や会話にLINEを使う。友人の電話番号やメールアドレスを知らないことが多い。 ・Twitter、Instagramでは、友人の投稿を確認する。 ・LINEでは、文字のやり取りが多いが、早く伝えたいとき、伝えることが多いときなどはLINE電話を使う。 		
2	家族や親せきとのコミュニケーションにSNSを活用している	34人 (81%)	8人 (19%)
	(関連するインタビューコメント) <ul style="list-style-type: none"> ・親とは、主に事務連絡でLINEを使う。お天気や出かけ先での様子を撮影した写真を送ることがあるが、気持ちを話すことはあまりない。 ・親に面と向かって言いづらいことや謝罪をするという使い方をしている。 		
3	友人の投稿へのリアクションや、コメントを書き込むことがある	28人 (67%)	14人 (33%)
	(関連するインタビューコメント) <ul style="list-style-type: none"> ・Twitterでは、友人の投稿に、リツイートで冗談をいうことがある。 ・友人の投稿には自分に関係がある話題のときにのみコメントをする。 ・友人の投稿が面白くても、コメントせず、会ったときに友人に伝えている。 ・友人のInstagramのストーリーをただ見ていることが多い。 		
4	SNS等に自分の日常や友人・家族と過ごした時の様子等を写真や動画で投稿することがある	21人 (50%)	21人 (50%)
	(関連するインタビューコメント) <ul style="list-style-type: none"> ・SNSでは文字よりも写真や動画の方が、伝えたいことが伝わりやすい。 ・Twitterでは投稿した映像の効果をあげるため、文章で補足して投稿する。 ・Instagramでは楽しい時、感情が動いた時に写真・動画を投稿している。 ・Instagramでは公開範囲を限定し、友人との動画を投稿する。文字では投稿しない。また、Instagramのストーリーは24時間で消えるため手軽に投稿できる。 		
5	SNS等に自分の日常や友人・家族と過ごした時の様子等を文章で投稿することがある	17人 (40%)	24人 (57%)
	(関連するインタビューコメント) ※回答不明者1人 <ul style="list-style-type: none"> ・Twitterでは特定の友人とのアカウントをつくり、悪口や愚痴を書き込む使い方をしている友人がいる。 ・Twitterでは「趣味アカ」で絵を投稿するが、日常の様子は投稿しない。 ・自分の主張が記録として残ることが怖いため、SNSでは投稿しない。 		
6	面識のない他人や不特定多数の人とのコミュニケーションにSNSを活用している	15人 (36%)	27人 (64%)
	(関連するインタビューコメント) <ul style="list-style-type: none"> ・Twitterでは「趣味アカ」を2つ持ち、別々の人と繋がっている。 ・YouTubeではゲームの攻略動画を見て、コメントをしている。 ・Instagramでは写真を投稿し、知らない人にフォローされている。リアルとの差があるため、リアルの友人とは繋がっていない。 ・オンライン上で、友人や知らない人と一緒にゲームをすることがある。 		

エ SNSの使用により感じていることに関するアンケート結果

本調査に協力いただいた若者のうち、SNSは日常生活になくてはならないものになっていると回答した人は90%である。また、SNSがあることで時間を浪費してしまったと回答した人は88%である。さらに、SNSがあることで知人・友人の輪が広がると回答した人は69%おり、SNSの使用が若者の日常生活や友人関係に影響を与えていることがわかる。

また、SNSでの人間関係のトラブルを経験したと回答した人は38%、SNSで自分の悩みを相談しやすいと回答した人は33%、SNSで友人と自分を比較すると回答した人は26%と、SNSが日常生活や友人関係に影響を与えている一方で、友人関係のトラブルや、悩みを打ち明ける、友人と自分を比較するという割合が低い結果となっている。

さらに、その他の質問としてSNSにより自分を表現しやすい、目標をみつけられる、友人や家族との絆を感じる、オリジナリティを表現できるなどについては、「よくあてはまる・少しあてはまる」と「あまりあてはまらない・全くあてはまらない」にあまり差がない状況であった。

【SNSの使用により感じていることに関するアンケート結果】

	質問	回答	
		よくあてはまる/ 少しあてはまる	あまりあてはまらない /全くあてはまらない
1	SNSは日常生活になくてはならないものになっている	38人 (90%)	4人 (10%)
	(関連するインタビューコメント) <ul style="list-style-type: none"> ・SNSがないと生活は成り立たない。LINEは連絡手段、Twitterは情報収集、YouTubeは暇つぶしに使っている。 ・スマホを使わない日を設けるとしたら、予めスマホを見ないことをTwitterやInstagramで宣言しておかないと怖い。 ・LINEは連絡手段のため、ないと困るが、そのほかのSNSはなくても困らない。 ・携帯を持っていなかった頃は、友人との連絡は電話だった。連絡手段に関しては、なくてはならないものではない。 		
2	SNSがあることでつい時間を浪費してしまったことがある	37人 (88%)	5人 (12%)
	(関連するインタビューコメント) <ul style="list-style-type: none"> ・暇つぶしにTwitter、YouTubeをみていて時間を浪費していると感じる。 ・Instagramでフォローしている友人のストーリーの動画が流れてきて、ずっとみてしまうということがある。 		
3	SNSがあることで知人・友人の輪が広がり、知らないことを知ることができる	29人 (69%)	12人 (29%)
	(関連するインタビューコメント) ※わからない1人 <ul style="list-style-type: none"> ・あまり話したことがなくても、Instagramの投稿にリアクションがあり、そこから繋がりが広がることはある。 ・Facebookは、地域関係や趣味の知人が多く、自分の興味のある分野の知見を広げるために使っている。投稿ではLINEやInstagramと違い丁寧に表現している。 		

	質問	回答	
		よくあてはまる/ 少しあてはまる	あまりあてはまらない /全くあてはまらない
4	SNSがあることで、自分の今の気持ちや感情を表現しやすい (関連するインタビューコメント) ・メッセージのやり取りをする人は、仲がいいので気持ちを伝えられる。 ・SNSでは素直に自分の気持ちは言えない。 ・LINEは連絡手段であって、雑談をする意味が分からない。	24人 (57%)	18人 (43%)
5	SNSがあることでこうなりたい! や目標を見つけることができる (関連するインタビューコメント) ・Twitterで有名人の投稿を読み、目標や夢につながることはあると思うが、いいなど思う投稿を見ても自分が深めないため、Twitterを見ることは時間の浪費につながると思う。 ・Facebookは本人名義であるため、リアルとネットの人間関係が共存しており、それを増やしていくイメージがある。ただし、今自分はそれを求めていないので使っていない。	22人 (52%)	19人 (45%)
6	SNSがあることで、友人や家族との絆を感じられる (関連するインタビューコメント) ・友人との絆は、SNSでも感じられる。 ・友人に共感してほしいことがあるとInstagramやTwitterに投稿する。 ・Facebookでは、投稿に対して皆が「いいね」と反応しないとまらない感じがする。 ・SNSでの友人とのやりとりは、連絡事項のみ。信頼関係が深まることはない。	20人 (48%)	22人 (52%)
7	SNSがあることで自分のオリジナリティを表現しやすい (関連するインタビューコメント) ・SNSで自分を発信して、自分はこういう人間であるということ表現できる。 ・SNSで自分のオリジナリティを表現することは考えない。自分のオリジナリティは何かという悩みはある。	17人 (40%)	24人 (57%)
8	SNSがあることで人間関係のトラブルや嫌な場面に巻き込まれることがある (関連するインタビューコメント) ・自分がつながっている2人の友人の裏アカで、双方が悪口を言っており、別々に相談を受け、対応に苦慮したことがある。 ・自分を含めて3人のLINEグループで、2人の友人が言葉尻をとって喧嘩になることが多く、その仲裁をすることが大変である。	16人 (38%)	26人 (62%)
9	SNSがあることで自分の悩みや抱えている問題を相談しやすい (関連するインタビューコメント) ・悩みを相談するときにSNSを使うことはない。相談では直接会って話したい。 ・LINEで悩みを相談されることがあるが、文字でやり取りすると伝わり方が違ってしまふことがあるため、会って話をしたい。 ・SNSで友人のあたり障りのない相談には乗る。 ・SNSだと自分の気持ちを抑えないので言いすぎてしまう可能性があるが、対面していれば多少は抑えられる。	14人 (33%)	27人 (64%)

	質問	回答	
		よくあてはまる/ 少しあてはまる	あまりあてはまらない/ 全くあてはまらない
10	SNSがあることで友人と自分を比較したり、悩んだりすることがある	11人(26%)	31人(74%)
	(関連するインタビューコメント) ・他人の投稿をみても、感情は動かない。 ・Facebookでは、意識の高い、活動的な人が投稿するため、友人と自分を比較して悩むことはある。劣等感を感じるわけではないが刺激される。 ・Instagramに投稿していたが、自分と友人を比較して疲れてしまい使用を止めた。		

(2) インタビュー発言の状況

ア 情報ネットワーク社会における若者の信頼関係の構築と成長

<信頼関係を構築することに否定的な意見>

- SNSでの友人とのやり取りは、連絡事項のみであるので、友達との信頼関係は、SNSでは深まらない。また、SNSでの出会いが初対面の場合、文字で会話することになるが嘘をつくことが多いと思うため、信頼関係は深まらない。
- 信頼関係をSNS上で構築していくという考え方はない。SNSは、信頼関係が現実で構築された人とのコミュニケーションツールのひとつとして使っているため、SNSをすることにより信頼が生まれることや、関係性が濃密になることはないと思う。
- 顔がわからないからこそ、言えることもあるが、信頼関係は難しいと思う。

<信頼関係の構築、成長に関する肯定的な意見>

- 友人との絆は、SNSでも感じられる。
- 常にSNSで連絡を取り合えることは、友人関係や信頼関係を深めることに役立つ。位置や距離が関係なく、精神的に近い距離にいられる部分があり、常につながっていられるのは信頼関係につながっているのではないかと思う。
- FacebookでNPO関係などの人と知り合い、活動に参加することは、SNS上で成長したというより、成長するきっかけになっている。
- 人間性の成長ではないが、Twitterなどで、知らない人と趣味でつながる場合に、趣味に関する情報やアドバイスをもらいやすく、それが成長につながる面はあると思う。友達のアドバイスも、知らない人からもらったアドバイスも両方とも大事だが、いろんな人からもらうことが大事だと思う。
- SNSでは、経験値的なものは簡単に手に入る感じだと思う。YouTubeでは、自分がやってみたいことを実際にしている状況を簡単に見られる。同じことを自分でやる場合には時間がかかる。文章で読むより、動画の方がノウハウは得やすい。
- 成長になるかはわからないが、SNSで多くの知識を得ることはできる。それが正しいかは自分で確認しないとわからないが、知識にはなると思う。情報を得たいと思わずとも、友人がリツイートした他人の情報が自然に入り、自分が登録すれば、興味のある情報が自動的に送られてくる。
- 自分が制作したものをインターネットで販売し、色々な人に買ってもらうことは

成長とは違うが前進したと感じる。

- 自分の作品を投稿することで、作品の質が上がった。投稿する以前は自己満足で終わっていた。人に見せることで、人に見せたいという気持ちが強くなり、技術力を磨くことができ、向上心が生まれた。

<SNSの「いいね」に関する発言>

- SNSの「いいね」を多くもらうことが自分を成長させるのかという点について、「いいね」をもらった人が成長するのではなく、「いいね」を与えた人が、相手の投稿によって成長したことを証明するためのものと感じる。「いいね」を多くもらえることは、自分がいろんな人を成長させていると捉えられるのではないかと。
- 自分が「いいね」を押すときは、自分に利益があったなと思うときに押す。その投稿が面白いとか、自分のためになったなと思うと「いいね」を押す。また、共感という意味で「いいね」を押すこともある。
- 成長になるかはわからないが、自分が投稿したものに「いいね」を押されると嬉しいので、どんな投稿をすればいいのか、写真や文章などを工夫するようになった。
- 「いいね」に関しては、年齢も関係すると思う。高校生の時には友人の投稿に全て「いいね」を押していた。友達に対して、自分が仲良しだよというアピールで押すことはあると思う。友達によって、「いいね」を押す、押さないがあると気にする人が実際にいた。
- 自己満足で投稿しているため、「いいね」を期待していないが、リアルな友人には反応してほしい。

イ 曖昧なコミュニケーションが人間関係におよぼす影響

<意見が異なる場合に関する発言>

- SNSでは、自分と異なる意見が出てきたときは無視をする。異なる意見というのは、人を傷つけるような、人格を否定するような言葉である。自分は、価値観を否定するような言葉は使わないし、使われたら無視をする。対面で言われた場合は返すしかなかったが、SNSはタイムラグが生じることが当たり前だから無視しやすい。リアルなコミュニケーションをとるよりも自分が傷つかないようになりやすく、自己防衛という感じである。
- はっきり言いたいことがあったとしたら、相手を否定するようなことは言わないが、間違っていることは言うかもしれない。
- 白黒はっきりさせるコミュニケーションは、気が置けない仲間でないといけないのではないかと。気を使っている相手だと曖昧なままやり取りが進むことがあると思う。
- 曖昧なコミュニケーションをとっていることについて、SNSと現実とであまり変わらないような気がする。
- SNSの文字のやりとりでは、相手によって感じ方、受け取り方が違うことがあるため、相手の言っていることがわからない場合は確認している。LINEの文字や絵文字

のやり取りで、相手に意図が伝わらず、怒らせた経験がある。

<「キャラ」に関する発言>

- LINEの文章と実際に会って話す感じとテンションが違うと言われたことがある。文章にするとやりやすいこともあるため、キャラを変えるというよりは、自然と変わっているということがあるかもしれない。
- LINEで文章を書くことが苦手な人がおり、「コミュ障⁶」がLINE上にもある。一方で、LINEではいい感じなのに実際とは違う人もいる。対面でのコミュニケーションが苦手な人でも、LINEだとすごく明るい子だなという人がいる。対面で表現できていないだけで、いい子だと感じることもある。
- 例えば、この人にはたくさん趣味の話をするが、職場の人だからきりっとするなど、相手によって態度を変える。別々にアカウントを持つことも同じことではないか。現実でも人によって対応を変えているから、SNS特有のものではないと思う。

<スタンプや絵文字の使用に関する発言>

- SNSでは、文章が長くなりすぎないように気を付けている。LINEは、会話の延長上のものであるので短い文章で表現する。自分の意見をぶつけるのではなく、相手の意見も取り入れながら会話をする。
- LINEの会話を終わらせたいときには暗黙のルールでスタンプを押す。
- 顔文字を付けた方が、自分の意思が伝わると思う。相手の発言に絵文字があると大体こういうことかなと捉えることができる。
- スタンプを使わず、句読点だけで終わるLINEの文章は怖いと感じる。

ウ 親子のコミュニケーション

<親子間のSNSの使用に関する発言>

- 親とLINEはしない。
- 親に友人と出かけている写真を送ることや、雨が降ってきたとLINEをするが、気持ちを話すことはあまりない。
- 親とは、真剣な頼み事や、喧嘩をして謝るときに使う。面と向かってだと、なぜ悪かったか説明しなければならないが、LINEだとすらっといける。
- 親に気持ちを伝える時にSNSを使うことがある。相談したいことを書いて事前に伝える。伝わらない部分は対面して補足する。

⁶ コミュ障：正確には「コミュニケーション障害」の略であるが、一般に「コミュ障」という言葉を使うとき、それは専門的な意味合いではなく、「コミュニケーションが苦手な人」という程度の意味である。(正木 大貴(2019)「SNSは人間関係を変えたのか?」『現代社会研究科論集：京都女子大学大学院現代社会研究科紀要』13, pp. 123-136. 引用 <http://hdl.handle.net/11173/2855>)

＜進学や就職など人生で重要なことを決定することに関する発言＞

- 親には、進学先や就職先を決定するときなど大事なことは直接話す。インターネットの情報も信頼性が高いところしか見ないし、見ても参考にするまでで決定打とはしない。大学受験時には、予備校など専門の人の意見を参考に決めた。
- 親の考えや価値観が全て正しいとは思っていない。家族でも価値観や生き方が違うことはある。
- 重要な意思決定の場では大学進学時や就職先も基本的に親に従ってきた。親以外に信頼する大人は、学校の先生であった。

＜親が子どもの位置情報を把握することに関する発言＞

- 子どもが小さいときには、親が位置情報を把握することはやむをえないこともあると思うが、大きくなってきたら子どもの意向を聞くことが大切だと思う。
- 過保護で、子どもを信用しなさすぎだと思う。
- 安全のためには仕方ないが、子どもが息苦しくなってしまうと思う。位置情報を無効にする方法を探して解除した例を知っている。親が子どもに出し抜かれることもある。

エ その他（5歳や小さい子どもに教えてあげたいこと）

- 一度ネットに上がった情報は消すことができないということを教えたい。
- ネットの世界は、リアルの世界と比べると子どもだからと許されることがない。大人も子どもも関係ないということを伝えたい。
- SNSの使い方ではプライバシーに気を付けてほしい。写真を掲載することはどういうことかという認識は持たせておくべきだと思う。感覚の軽さを重くしたい。
- 自分の経験では、もっと早くSNSをやっていたらよかった。持っていないときにメディアリテラシーを教えられてもわからない。
- リテラシーだけではなく、ネットやスマホでできることはたくさんあるので、機能の活用方法を教えるとよいと思う。
- 一生スマホとともに生きていく子どもたちは、スマホに縛られずにいかに生きていくかを勉強した方がいい。色々なことを学ぶことに時間を使った方がいい。

4 検証結果

(1) 青少年のSNS利用について

- 調査に協力いただいた青少年のSNSの利用では、その種類によって利用方法が異なっている。調査の中で1番利用が多かったLINEは、友人や家族など身近な人間関係を補完するものとして利用している。また、友人とは自分や相手を傷つけ合わないよう気づかいながらやりとりをしている。2番目に多かったTwitterでは、情報収集を主な目的で使用しており、発信する場合は身近な友人に限定したアカウントのほか、匿名のアカウントで「趣味アカ」、「愚痴アカ」など好きなことや嫌なことなど本音を発信するような使い方をしている。一方、実名のアカウントを原則とするFacebookの利用は少なく、利用目的は、自分の興味・関心のある活動をしている大人とのつながりやイベント情報の入手であり、丁寧な発信をするよう気を使うという状況であった。

- デジタルネイティブといわれる青少年たちが、SNSを使いこなしているのかという視点では、青少年自身にSNSを使いこなしていないという意見があり、SNSの利用に関して受動的である。一方で、積極的に使っているという意見もあり、青少年の利用状況の中に差が生じている。こうした中で、青少年支援を考える場合、様々な機会に公平にアクセスできるのかという点に考慮していく必要がある。
- 青少年がSNSを使う目的は、現実につながっている仲間とのコミュニケーションツールとしての使用が多く、自己承認欲求を満たすための情報発信ツールとして使っている感覚は少ない。

(2) 青少年のコミュニケーションについて

- 「自分の発言を相手にどうとでも取ってもらえるような表現をすることがある」というインタビューの発言から、自分や他人が傷つかないように気を使っている様子が伺える。こうしたコミュニケーションでは、他人への評価を積極的にしないため、他人から自分のことを積極的に評価してもらえないことも少ないと思われる。
- SNS上で信頼関係が構築されるかという点については、SNSのやりとりから信頼関係を築くことに否定的な意見が多い。また、実名ではないSNSだけの関係であれば信頼関係ができるかもしれないという意見もあった。現時点では、青少年のSNSによるコミュニケーションは、主に身近な人とのやり取りを補完している利用となっている。
- ひきこもりの経験がある青少年の中には、TwitterやYouTubeなどで自分が作成した絵や写真を投稿している人もいる。投稿に対する評価「いいね」はあってもなくてもよく、「いいね」をされても、自分を評価されたのではなく、投稿した絵などが評価されたものとして受け止めているという意見があった。また、投稿する内容について完璧な内容になるよう、十分に時間をかけて準備をしたうえで発信しているという例もあった。

(3) 「キャラクター」とアカウントの使い分け

- 青少年は、実名ではないTwitterなどのアカウントを使い、自分の一部を様々な「キャラクター」として人工的に作り、不特定多数の人に情報発信している。また、青少年は、陽気または陰気なキャラクターという意味合いの「陽キャ」、「陰キャ」という言葉を使い、現実の人間関係でも「キャラクター」に着目して、相手とどう接するか、評価するかということが強まっていると考えられる。
- 若者には、「キャラクター」の設定について、意識せずに場面に応じて自分を変える者もいれば、一生懸命考え自分を変えることに苦しみを感じている者もいる。また、困難を抱える若者の中には、場面に応じて自分を変えることができず、むしろ、なぜ変えなくてはならないのかと個人を大切にしているものもいる。
 こうした若者の状況は、それぞれ分かれているように見えるが、臨機応変に「キャラクター」を使い分けている若者が、コミュニケーションのつまづきから、困難を抱えることになるかもしれず、表裏一体であるという視点が必要である。

(4) 「趣味などの目的」とアカウントの使い分け

- 青少年には、「キャラクター」の使い分けとしてではなく、目的を持って複数のアカウントを使い分けしている場合がある。インタビューでは、Twitterのアカウントを身近な友達とのコミュニケーションと、自分の作品を発信するアカウントを別に設定しているケースがあった。自分の好きなことを発信することで、日常では出会いにくい、同じような趣味、嗜好のある人と出会う目的で使い分けしている。また、自分の作品をSNSで発信することにより、不特定の意見がとても参考になり、身近ではない人からの意見がとても意味があるということを理解し、経験した人もいた。
- 「キャラクター」を設定することが苦手な青少年も、YouTubeで自分の作品を発信し、不特定の人達に作品を認めてもらったことで何らかの変化を自分の中にもたらしたと捉えているということがあった。

第5章 情報ネットワーク社会における青少年育成・支援に向けて

1 青少年を育むコミュニケーション

(1) 自己形成に必要な他者との関係を育む

- SNSによる青少年のコミュニケーションは、身近な人とのやりとりを補完するだけでなく、進学などで日常的に会わなくなった友人や趣味でつながる SNS 上の関係など人間関係を拡大することにもつながっている。SNSにより、今まではつながることができなかった関係が新たな関係に発展していく可能性があるが、現状は身近な人との関係を維持することに利用されていることが多く、SNS を能動的に活用していくことも大切である。
- 自己形成では、他者とのコミュニケーションにより、他者が自分をどう見ているのか（他者認識）を通して自分を認識することが必要である。

コミュニケーションの曖昧さや「キャラクター」をつくることは、多元的な自己の形成を進めることもあり、他者認識を通して自己を形成していく難しさがあると考えられる一方で、互いを尊重することや、良い関係を保つコミュニケーションをしているという見方もできる。自己形成については、顔を合わせたコミュニケーションや実体験を大切にするとともに、青少年のコミュニケーションの現状を理解し、青少年が他者との関係をしっかりと育み、成熟していく方法を探していく必要がある。
- その一方で、コミュニケーションが苦手で、その機会が少ないひきこもりなど困難を有する青少年が、信頼できる人と SNS によるコミュニケーションの機会を持つことは、その成長や発達に有益だと考えられる。

(2) 自己肯定感を育むことを大人が意識する

- 大人より子どもの方が、SNS などの情報ツールを使うことに慣れており、小中学生世代でも SNS で知り合った人と実際に会うということが起きている。SNS での言葉を簡単に信じてしまうことは、自己肯定感が低いことに一因があると考えられる。自己肯定感が低いと寄り添ってもらえていないという感覚と認めてもらいたいという感覚が強く、SNS での自分を肯定する言葉により、自分のことを全て肯定されている関係だと思込んでしまうことがあると考えられる。

自己肯定感には、自分のことを言葉で表現して人に理解してもらえる力があるかということと関わりがある。子育ての中で、例えば 100 点をとると褒めるという条件付きの承認ではなく、子どもの「ありのまま」を無条件で受け止めることを意識することや、信頼できる大人から見守られる中で、自分が役に立つ、人にあてにされる経験を積んでいくことが大切である。
- 家庭・学校・地域がともに共通認識を持って、顔が見える場で子どもを育てていく環境をつくっていく必要がある。そうした環境づくりは、まちづくりそのものであると考え、自分たちの手で作っていき、それを少し行政が支えるくらいが良いと考える。

普段から地域の大人が、子どもを見守ることを心におくことが大切である。

(3) 成長のきっかけとしての SNS 利用を進める

- 青少年の育成や成長においては、多様な体験の機会を増やすことが重要であるが、今の青少年の多くは、「空間、時間、仲間」が少なく、経験を蓄積していくことが難しい状況である。SNS などの情報ネットワークは、青少年の日常を維持している一方で、社会参画につながるような能動的な SNS の利用はそれほど多くないと思われる。日常ではできない体験や学びが青少年にもたらす影響は大きいいため、積極的にリアルな生活とバーチャルな空間を結びつけ、質の高い生活環境にしていく視点を持つことが大切である。
- SNS で目的を持ち、情報を受発信することで、これまでになかった出会いができ、青少年の成長においては、良い影響を与えるきっかけになりうる。一方で、SNS 上のコミュニケーションは匿名のやり取りが多く、安心できる相手かわからないため、情報のやり取りには十分に気を付ける必要がある。

2 社会の中で生きづらさを感じている青少年への支援

(1) 青少年の情報行動から相談・支援の仕組みをつくる

- 青少年は、SNS・インターネットで情報収集することが多く、悩みごと SNS 等で検索することがある。検索した結果をどう読み、感じるのかを支援する側が理解することが大切である。
- 悩みを持った青少年は、インターネット等で検索して、相談機関を見つけても、自分の気持ちを言語化できず、相談できないこともある。そのため、気持ちをまとめずに短文で表現できる LINE や Twitter は青少年にとって使いやすいツールといえる。
- これまで相談の場では電話や面接を行ってきたが、青少年を対象にした相談では SNS を活用することが必要である。また、情報化が進む中で、SNS を提供する企業と行政が連携して、SNS の使用状況から危険性を察知するなど、青少年を見守っていく仕組みをつくることも、一つの方法である。
- 青少年が、安心して辛さを言葉にできる場が必要である。SNS で「家出をしたい」と発信すると、青少年を騙そうとする人につながる恐れがある。NPO 等の団体が、学校に行くことが辛い子どもたちに向けて学校や家庭以外でも安心できる居場所や相談場所を紹介する「#学校ムリでもここあるよ」というキーワードにより SNS 上で発信している。行政でも具体的な言葉を発信して、青少年に呼びかけていく必要がある。

(2) 「ゆるい相談」と「寄り添い型」の相談・支援の場をつくる

- 学校の保健室は、児童・生徒が体の調子が悪いときに行く場所だが、いじめについて相談できる場ともなる。また、最近はキャリアバーという、普通にお酒を飲む場所だが、バーテンダーがキャリアカウンセリングを行い、職場や転職の悩みを相談でき

る所がある。このように、表向きは何かの相談に特化しているのではなく、ゆるい感じの中で、青少年が相談できる場が大切である。

- 困難を有する青少年には、支援する側が問題を解決しようとして相談にあたると、相談すること自体に辛さを与えることになる。問題を解決することを目的にせず、相談者の思いを受けとめ、心に寄り添う支援をしていくことが大切である。
- 公的な相談機関は定められた時間や場所で相談を受けるが、相談者となる青少年には、定められた時間や場所に行くことも大変で、相談に行かないということがある。NPO 法人が行う相談の中には、親が相談につながったら、オンラインでチャットやビデオ会議システムを使った相談をすることがある。また、親とのオンライン相談中に青少年本人が画面に出てきて、様子を確認できることもある。情報化の進展により、相談につながるコンタクトの方法が多様化しているため、青少年の相談・支援の手法を広げていくことが大切である。

3 青少年の健全育成と情報ネットワーク社会

(1) 大人も青少年も情報リテラシーを高める

- SNS やインターネットでは、プライベートな日常の出来事がパブリックなネットの空間に情報として発信され、青少年にとっては自分が生きている世界と結びつきやすく、パブリックなこととプライベートなことの境が曖昧で、ボーダーレスになっている。このため、青少年の情報リテラシーを高めていくことが必要である。
- SNS やインターネットでは、青少年も大人も同じ場で交流しやすいが、トラブルに巻き込まれることもあり、リスクも高い。現実の世界では、見た目で青少年だとわかるが、バーチャルの世界では青少年だと分かりにくい。青少年と大人の双方が、SNS のリスクを理解していくことが重要である。
- SNS やインターネットの情報が正しいかや自分にとって有意義であるかは、自らの経験をもとに判断することになる。判断のもととなる経験を蓄積するために、青少年が、信頼できる人とのコミュニケーションを大切にすることも、情報リテラシーを高めていくことにつながる。

(2) 地域や行政が SNS を活用する

- 青少年は、SNS のツールを情報収集・情報発信・コミュニケーションという場面で使い分けており、日常生活になくはならないものと認識している。青少年行政や地域の教育的な立場にある人は、SNS などのメディアを積極的に活用していく必要がある。青少年の SNS 利用の現状を踏まえて、どうメディアを利活用してもらうか、また、行政や団体による SNS の活用が、青少年の成長・発達に寄与するのかという観点で検討していくことが大切である。
- 通信網が 5G になることにより、今以上にテレビ電話が簡単にできるなど、顔の見えるメディア上のバーチャルな関係性をつくることができるだろう。そうしたことが

らも、バーチャルではあるが安心や信頼につながる新たな人間関係を構築できる可能性がある。

(3) 情報ネットワーク社会における学び

- 情報ネットワーク社会では、SNS の利用により、似ている人が集まり自分に都合のいい情報だけが収集されやすく、SNS を活用する人と活用できない人がわかれるといった状況が一層進むと考えられる。青少年に関し、情報ネットワーク社会における機会均等に配慮していくことが大切である。
- 「シンギュラリティ」⁷や「人生 100 歳時代」という言葉からは、何を学べば（教えれば）よいのかわからない時代の到来が予測される。何度もスキルや価値観を学び直す人生になることを前提に、学校教育・社会教育はデザインされるべきである。
- 今後、AI など新しい情報技術の進展により、インターネットに自覚的にアクセスしている実感がなくままデータを取得したり、情報が提示される社会に移行していく懸念がある。多くの青少年が、テクノロジーに「遊ばれる」、「コントロールされる」のではなく、テクノロジーを使って新しい「遊び」や「社会」を生み出していくという姿勢を身につけ、実践する機会を提供することが重要になる。学びを創造の方へつなげ、自分が当事者であるという感覚を身につけることが大切であり、それをどう行政や団体が支援するのが問われている。
- 青少年と比較して大人は Facebook の使用が多く、SNS による自己表現の場にも世代間に違いがある。また、大人は青少年との意見の違いがあると、自分の枠の中で青少年を正そうとすることがある。SNS の利用をはじめ、大人が青少年と違いがあることを認め、一方的な説得や指導などをせずに、世代間の違いを楽しみ、両方がうまく交わる視点で進めていくことが重要である。

⁷ シンギュラリティ：人間の知性を人工知能（AI）が超え、加速度的に進化する転換点。米国の未来学者、レイ・カーツワイルはその時機の到来を 2045 年と予想する。人間が担ってきた高度で複雑な知的作業の大半を AI が代替するようになり、経済や社会に多大なインパクトをもたらすと考えられている。（2019. 1. 1 日本経済新聞引用）

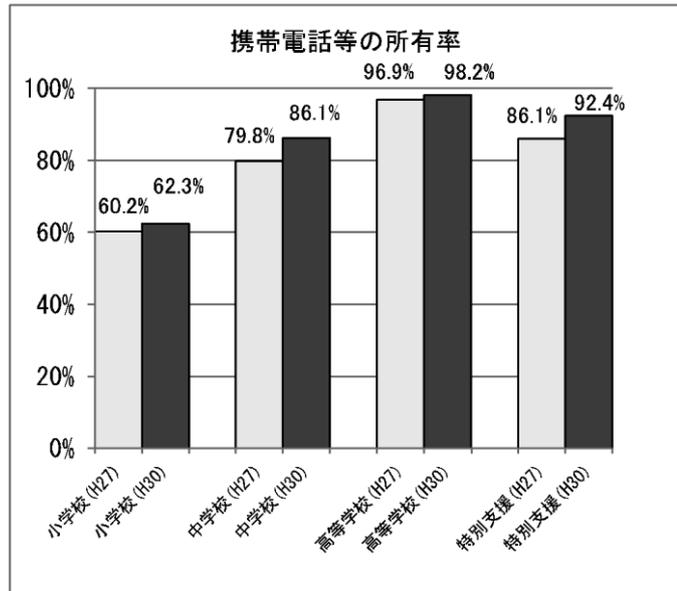
参考編

審議テーマに関する図表

● 携帯電話等の所有率（県内）

携帯電話等の所有率は小学校 62.3%、中学校 86.1%、高等学校 98.2%、特別支援学校 92.4%となっており、多くの児童・生徒が携帯電話等を所有していることがわかる。また、小・中・高と学年が上がるにつれて所有率が上昇している。

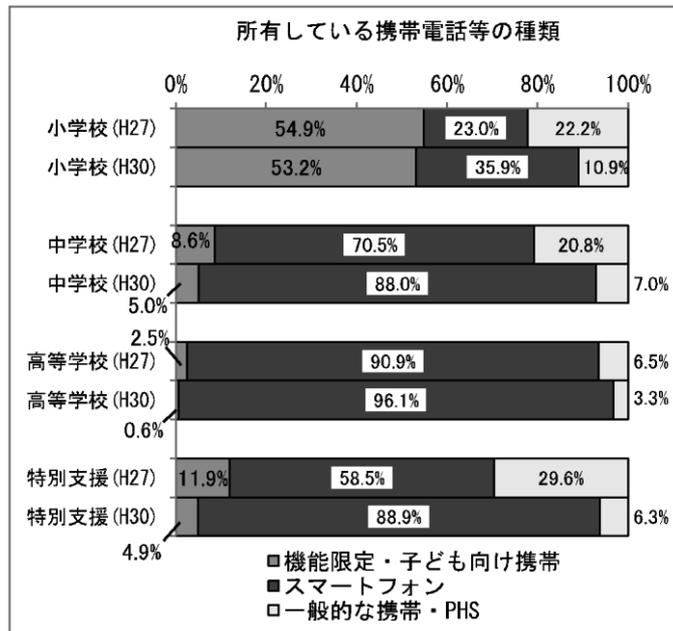
（出典：神奈川県教育委員会「携帯電話及びパソコンにおけるインターネットの利用状況等に関するアンケート調査結果」平成 31 年 3 月）



● 所有している携帯電話等の種類（県内）

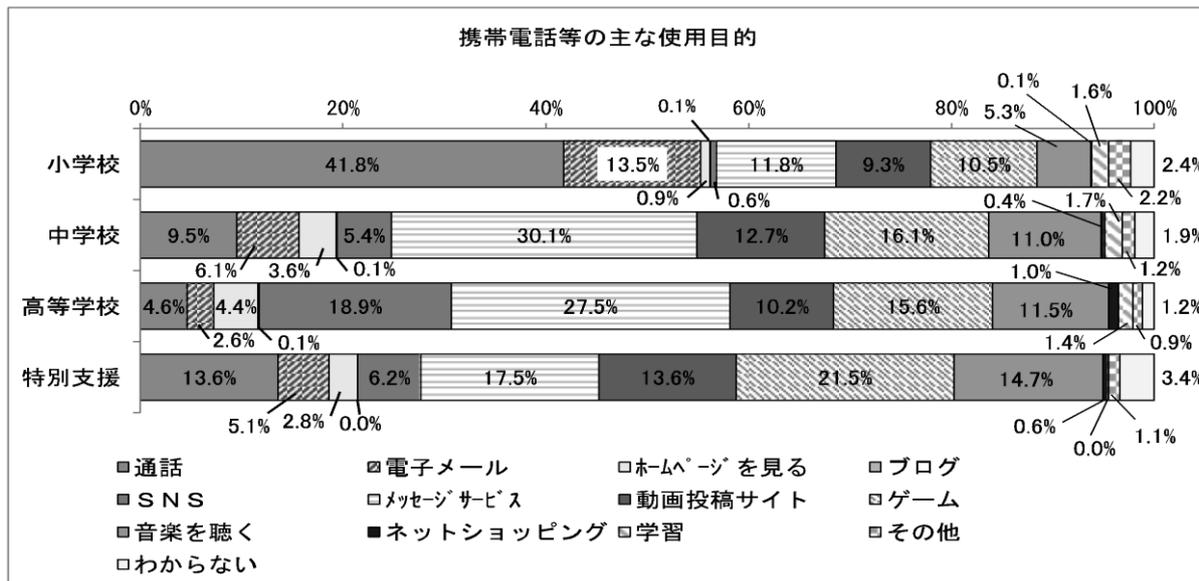
小学生が最も多く所有しているのは「機能限定・子ども向けの携帯電話」であるが、中学生になるとスマートフォンを所有する生徒が急増する。携帯電話等を所有する児童・生徒のうち、スマートフォンを所有している割合は、小学校 35.9%、中学校 88.0%、高等学校 96.1%、特別支援学校 88.9%となっている。

（出典：神奈川県教育委員会「携帯電話及びパソコンにおけるインターネットの利用状況等に関するアンケート調査結果」平成 31 年 3 月）



● 携帯電話等の主な使用目的（県内）

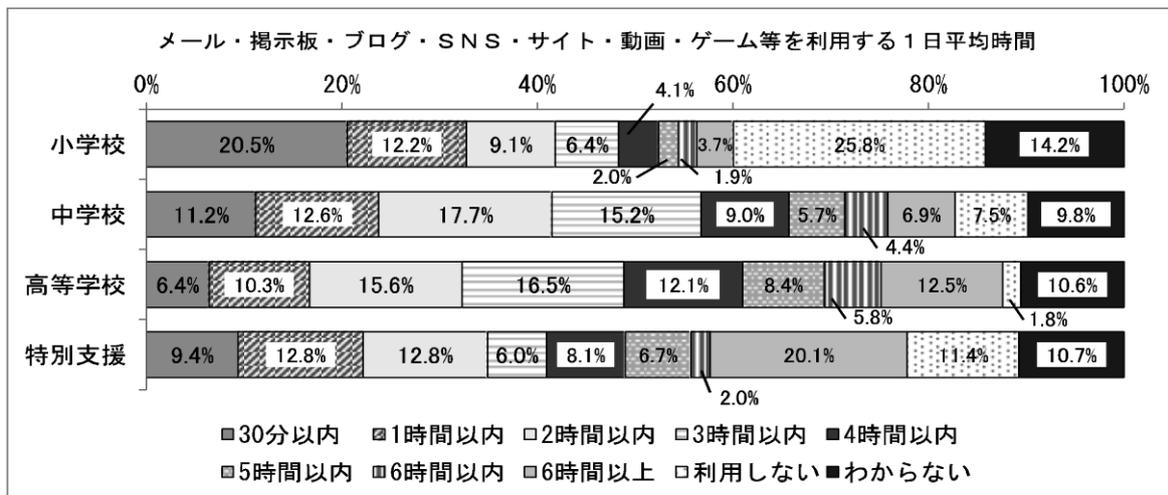
携帯電話等の主な使用目的（どのような目的で使うことが一番多いか）について、小学校では「通話」と回答した児童の割合が最も多いが、中学校と高等学校ではLINEなどの「メッセージサービス」と回答した生徒の割合が最も多い。また、特別支援学校では「ゲーム」と回答する生徒の割合が最も多く、次いで「メッセージサービス」となっている。



（出典：神奈川県教育委員会「携帯電話及びパソコンにおけるインターネットの利用状況等に関するアンケート調査結果」平成31年3月）

● 電子メールの送受信をしたり、掲示板・ブログ・SNSでメッセージを書いたり、読んだり、サイトや動画を見たり、ゲームをする時間の1日平均時間（県内）

小学校では「利用しない」児童の割合が最も高く、次いで「30分以内」の児童の割合が高くなっている。中学校では「2時間以内」、高等学校では「3時間以内」の生徒の割合が最も高く、特別支援学校では「6時間より長い」の生徒の割合が最も高い。また、4時間以上利用している児童・生徒の割合は、小学校7.6%、中学校17.0%、高等学校26.7%、特別支援学校28.8%であり、小・中・高と学年が上がるにつれて、長時間にわたって携帯電話等でインターネット等を利用する児童・生徒の割合が高くなっている。



出典：神奈川県教育委員会「携帯電話及びパソコンにおけるインターネットの利用状況等に関するアンケート調査結果」平成31年3月）

- この一年間に、携帯電話等のサービス（LINE や Twitter など）を使っていて次のようなことはありましたか。

携帯電話等のサービスを使うことで、新しい学校やクラスで友達が増えた (%)

	小学校 (n=2, 281)	中学校 (n=2, 632)	高等学校 (n=2, 144)	特別支援 (n=71)
1. この1年間に経験していない	67.2	31.6	16.6	25.4
2. LINE	8.2	47.7	49.0	49.3
3. Kakaotalk	0.0	0.1	0.2	0.0
4. Twitter	0.2	2.8	16.6	1.4
5. Facebook	0.0	0.3	0.2	1.4
6. Instagram	0.1	2.4	6.2	2.8
7. SNOW	0.5	0.9	0.6	0.0
8. 電子メール	0.9	0.9	0.2	1.4
9. スタディサプリ	0.0	0.0	0.0	0.0
10. Studyplus	0.0	0.3	0.1	0.0
11. Classi	0.0	0.1	0.0	0.0
12. YouTube	3.0	2.1	1.2	4.2
13. その他	1.8	1.4	1.3	2.8
14. わからない	17.9	9.5	7.9	11.3

携帯電話等のサービスを使うことで、離れ離れになった友達と中の良い状態が続けられた (%)

	小学校 (n=2, 281)	中学校 (n=2, 632)	高等学校 (n=2, 144)	特別支援 (n=71)
1. この1年間に経験していない	64.3	35.9	12.3	34.2
2. LINE	11.1	44.2	61.8	35.6
3. Kakaotalk	0.2	0.2	0.3	1.4
4. Twitter	0.2	2.1	11.9	5.5
5. Facebook	0.1	0.4	0.5	2.7
6. Instagram	0.1	1.7	4.2	1.4
7. SNOW	0.2	0.4	0.1	1.4
8. 電子メール	2.7	2.9	0.6	1.4
9. スタディサプリ	0.1	0.1	0.1	0.0
10. Studyplus	0.0	0.0	0.0	0.0
11. Classi	0.0	0.1	0.0	0.0
12. YouTube	0.8	0.2	0.3	0.0
13. その他	2.3	1.1	1.2	1.4
14. わからない	18.0	10.8	1.2	13.7

携帯電話等のサービスを使うことで、悩みが解決した

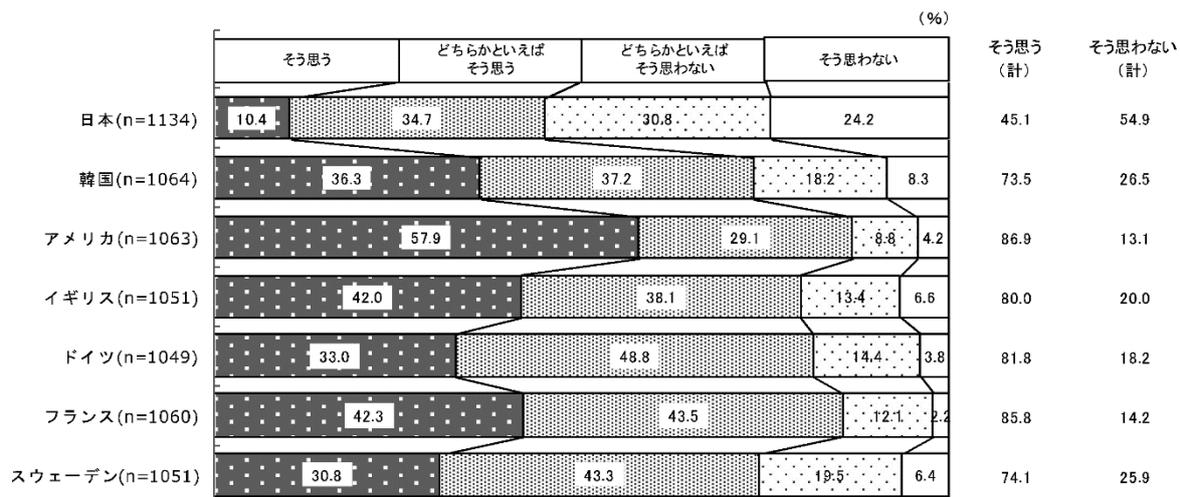
	小学校 (n=2, 281)	中学校 (n=2, 632)	高等学校 (n=2, 144)	特別支援 (n=71)
1. この1年間に経験していない	68.3	51.7	37.2	44.1
2. LINE	3.6	14.0	18.8	13.2
3. Kakaotalk	0.1	0.2	0.2	0.0
4. Twitter	0.5	2.7	0.2	0.0
5. Facebook	0.3	0.2	0.2	0.0
6. Instagram	0.2	0.5	1.1	1.5
7. SNOW	0.3	0.1	0.1	0.0
8. 電子メール	0.8	0.6	0.1	0.0
9. スタディサプリ	0.2	0.4	0.3	0.0
10. Studyplus	0.0	0.1	0.1	1.5
11. Classi	0.0	0.0	0.1	0.0
12. YouTube	3.0	4.0	2.8	2.9
13. その他	3.7	9.0	16.1	7.4
14. わからない	19.0	16.6	14.4	23.5

携帯電話等のサービスを使うことで、同じ趣味の友達を得ることができた

	小学校 (n=2, 281)	中学校 (n=2, 632)	高等学校 (n=2, 144)	特別支援 (n=71)
1. この1年間に経験していない	68.8	45.5	28.7	40.8
2. LINE	3.8	19.2	14.6	23.9
3. Kakaotalk	0.0	0.4	0.8	1.4
4. Twitter	0.9	9.5	33.8	11.3
5. Facebook	0.3	0.5	0.7	0.0
6. Instagram	0.3	3.9	5.9	2.8
7. SNOW	0.3	0.4	0.3	0.0
8. 電子メール	0.4	0.2	0.0	0.0
9. スタディサプリ	0.0	0.1	0.0	0.0
10. Studyplus	0.0	0.2	0.0	0.0
11. Classi	0.0	0.0	0.0	0.0
12. YouTube	4.5	4.1	2.0	2.8
13. その他	2.6	3.5	4.0	2.8
14. わからない	18.3	12.5	9.1	14.1

出典：神奈川県教育委員会「携帯電話及びパソコンにおけるインターネットの利用状況等に関するアンケート調査結果」平成31年3月)

●自分自身に満足している（諸外国比較）



出典：内閣府「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（平成30年度）」

平成 30・31 年期神奈川県青少年問題協議会実践検証事業アンケート

この度はインタビューへのご協力ありがとうございます。簡単なアンケートにご協力ください。

記入者氏名（イニシャル、ニックネーム可）：

1	あなたの年齢と性別	歳 男性 女性 どちらでもない
2	現在の学籍	小学校 中学校 高等学校 大学 それ以外
3	現在の居住エリアを教えてください。（任意）	例：〇〇市 or ●●駅近隣など
4	SNS（設問④に記載のものなど）を使うことはありますか？	ある ない その他（ ）

②①-4で「ある」と答えた方は、以下の設問にもお答えください。

（1＝全くあてはまらない、2＝あまりあてはまらない、3＝少しあてはまる、4＝よくあてはまる）

①あなたの SNS の使い方に、どの程度あてはまりますか。

1	私は友人とのコミュニケーションに SNS を活用している	1 2 3 4 わからない
2	私の家族や親せきとのコミュニケーションに SNS を活用している	1 2 3 4 わからない
3	私は面識のない他人や不特定多数の人とのコミュニケーションに SNS を活用している	1 2 3 4 わからない
4	私は友人の投稿へのリアクションや、コメントを書き込むことがある。	1 2 3 4 わからない
5	私は SNS 等に自分の日常や友人・家族と過ごした時の様子等を文章で投稿することがある。	1 2 3 4 わからない
6	私は SNS 等に自分の日常や友人・家族と過ごした時の様子等を写真や動画で投稿することがある。	1 2 3 4 わからない

③1日に SNS を見たり、SNS を通じてコミュニケーションをとったりしている時間の目安

→約（ ）時間

④次の SNS のうち日常生活でよく使っているものを上から 3 つ選択して、よく使っている理由を記載ください。

Twitter ・ Instagram ・ LINE ・ Facebook ・ Youtube ・ その他

1位（ ）その理由→

2位（ ）その理由→

3位（ ）その理由→

⑤以下の項目について、どのくらいあてはまりますか。

（1＝全くあてはまらない、2＝あまりあてはまらない、3＝少しあてはまる、4＝よくあてはまる）

1	SNS は日常生活になくてはならないものになっている	1 2 3 4 わからない
2	SNS があることで、友人や家族との絆を感じられる	1 2 3 4 わからない
3	SNS があることで、自分の今の気持ちや感情を表現しやすい	1 2 3 4 わからない
4	SNS があることで、自分の悩みや抱えている問題を相談しやすい	1 2 3 4 わからない
5	SNS があることで、自分のオリジナリティを表現できる	1 2 3 4 わからない
6	SNS があることで、こうなりたい！や目標を見つけることができる	1 2 3 4 わからない
7	SNS があることで、知人友人の輪が広がり知らないことを知ることができる	1 2 3 4 わからない
8	SNS があることで、つい時間を浪費してしまったりすることがある。	1 2 3 4 わからない
9	SNS があることで、人間関係のトラブルや嫌な場面に巻き込まれることがある	1 2 3 4 わからない
10	SNS があることで、友人と自分を比較したり、悩んだりすることがある	1 2 3 4 わからない

資料編

平成30・31年期神奈川県青少年問題協議会 審議経過

開催日	会 議	主な審議内容
平成30年 9月10日（月）	第1回協議会	<ul style="list-style-type: none"> ・会長、副会長の選出について ・平成30・31年期審議テーマについて ・企画調整部会委員の選出について
同日	第1回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> ・部会長、副部会長の選出について ・協議スケジュールについて ・委員意見発表、意見交換
10月31日（水）	第2回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> ・委員意見発表、意見交換
11月22日（木）	第3回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> ・委員意見発表、意見交換
平成31年 2月4日（月）	第4回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> ・中間とりまとめ（案）について
3月25日（月）	第2回協議会	<ul style="list-style-type: none"> ・企画調整部会中間とりまとめ報告
同日	第5回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> ・2019年度の展開について
令和元年 5月24日（金）	第6回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> ・実践検証事業（案）について
9月6日（金）	第3回協議会	<ul style="list-style-type: none"> ・企画調整部会における審議の進捗状況について
同日	第7回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> ・実践検証事業の状況について
10月25日（金）	第8回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> ・最終報告の検討について ・令和元年度神奈川県青少年育成活動推進者表彰受賞者について
12月6日（金）	第9回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> ・最終報告の検討について
令和2年 2月7日（金）	第10回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> ・最終報告（案）について
同日	第4回協議会	<ul style="list-style-type: none"> ・最終報告（案）について

平成30・31年期神奈川県青少年問題協議会委員

会 長	笹井 宏益	(玉川大学学術研究所教授) *
副会長兼 部会長	藤井 佳世	(横浜国立大学教育学部准教授) *
副部会長	坂倉 杏介	(東京都市大学都市生活学部准教授) *
委 員	青木 信二	(厚木市立森の里公民館館長) *
	小川 久仁子	(神奈川県議会議員)
	坂本 笙菜	(公募委員(大学生)) *
	田中 多恵	(認定特定非営利活動法人エティック横浜ブランチ マネージャー) *
	西野 博之	(認定特定非営利活動法人フリースペースたまりば理事長) *
	藁田 薫	(認定特定非営利活動法人育て上げネット執行役員) *
	牧野 篤	(東京大学大学院教育学研究科教授) *
	松田 良昭	(神奈川県児童福祉審議会委員長)
	米村 和彦	(神奈川県議会議員)

- 任期は平成30年7月20日～令和2年7月19日
- *印は企画調整部会委員



神奈川県

福祉子どもみらい局子どもみらい部青少年課

横浜市中区日本大通 1 丁目 231-8588 電話 (045) 210-3840 (直通)